

白山ふるさと文学賞

第十回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 優秀賞

私自身の理想像

北辰中学校三年

鈴木 すずき

佑奈 ゆな

私は自分の将来に大きな目標を持っている。それは「医療に関わる仕事」に就くことだ。そう考えるようになったのは中学校に入ってからのことだ。二つの大きな出来事が関係している。

一つは祖父の病気からだ。小学校の頃、祖母がガンと宣告され六十六歳の若さであの世へ行ってしまった。優しく強く、ユーモアのある祖母が私は大好きだった。祖母が亡くなった時、病院で私は必死に声を抑えて泣いた。今までの十五年の人生でもあのほど泣いた日はない。私が初めて家族を亡くした経験でああこんなに悲しいものかと思いついた。祖父も泣いていた。強気でカッコイイ祖父があんなに弱っているのを初めて見た。その時私は強く、強くこう思った。病気で人生を失う人を、病気で大切な人を失い悲しむ人々を減らしたい、と。医療というのは、人を助けるといっただけでなく、患者さんやその家族の未来をつなげるとても魅力的なものだと思つた。だから私は自らが医療と関わって悲しむ人を減らしたい。自らの手で、病気にかかってしまった方に希望や明るい未来を提供できるような人材の一人でありたいと強く思つた。祖母を失って何年かたったころ、祖父もガンであると告げられた。家族を失う痛みや辛さを知っていた私はひどくその現実を怖がった。祖父が手術を終え集中治療室に入っている時、不安で涙をこらえるばかりで、ああ自分は何もできないのだなと無力さを思い知つた。私は困っている人や苦しんでいる人を見て何もできない自分ではいたくないと思う。だからこそ医療という技術を駆使して一番に手を差し伸べられる人でありたいと思つた。実際、祖父は今も治療を続けながらだが元気に生活している。私が今祖父と会話をして笑い合えるのは「医療」と医療従事者の方のおかげだ。私はそんな「普通」の生活を送らせてくれている医療にととても感謝している。

二つ目は新型コロナウイルスによる社会の混乱からだ。新たに発見された未知のウイルスと聞き、それが日本にまで入ったと知ると私はとても恐怖を覚えた。日を重ねるごとに増えていく感染者を見るとどんどん

不安は募っていくばかりだった。でも学校が休校になってほとんど家から出ない生活が続くと不安は少しずつ薄まっていった。ある日久しぶりにニュースを見た。丁度医療従事者の方々が取り上げられていた。その時私ははっとした。感染者がいるということは治療してくれる人もいるということに気付いていなかった。私はとても申し訳ないという気持ちでいっぱいになった。私が不安を感じている時、ウイルスの一番近くにいる医療従事者の方たちはどれほどの不安や恐怖を抱えていただろう。きっと私の何倍、いや何十倍ものリスクや不安を背負っていたのだろう。

私は心の底から医療従事者の方々をすごいと思つた。私たちは自分の生活を守るために必死なのにどうしてこの方たちは人の生活を守るために必死になれるのだろうか。給料が高いのかな、と思つたりもした。でも実際は上がるどころか下がっているらしい。私は「絶対に人の命を助けるんだ」という強い意志を持っているからだろうと思つた。今の私にはできそうにない。自分の身を犠牲にして人を守るような覚悟は持つていないと思う。でも将来必ず色々な経験を積んで医療従事者の方たちのような強い気持ちを持つて人のために必死になれる大人になれると信じている。私の理想像は、人の命を守るためなら何だってできるような強い大人だ。

私は医療に関わる仕事をするにはまだまだ未熟な人間だと思つた。でも「人の命を助けたい」「悲しむ人を減らしたい」という気持ちは強く固く、持つていると思う。だから、それを実現できるように、努力すること、それを継続することを徹底していかなければならない。医師や看護師だけでなく薬剤師や創薬研究者、理学療法士など医療に関わる仕事はたくさんある。でもその一つ一つが人を救うために決して欠けてはいけない仕事だと思つている。そんな素晴らしい職業に何らかの形で関わり、毎日人のために汗を流せるような大人になれるように頑張りたい。自分がそんな人になれるよう決してあきらめず一日一日成長し続けていきたい。